

## 先進校に学ぶキャリア教育の実践

# 思考力育成プログラム、男女別学など 独自の教育システムでグローバル人材を育成

### — 東京・私立 かつ有明中学・高校 —

商業系の女子校からグローバル化に対応した共学校へと生まれ変わり、7年めとなるかつ有明中学・高校。丁寧な学習支援と進学指導、グローバル人材育成のための各種制度、思考力育成プログラム、男女別学…、次々に打ち出してきた特色と、それを支える組織運営にアプローチします。

取材・文／藤崎雅子

#### 実践のKeyword

🔍 中高一貫教育 🔍 学校改革 🔍 総合的な学習の時間  
🔍 グローバル人材育成 🔍 クリティカル・シンキング 🔍 男女別学

#### 開校時に掲げた 大学合格実績目標を達成

創立以来100余年にわたり女子を対象に商業・経済の実学教育を行ってきた嘉悦女子中学・高校が、2006年度に共学の進学校、かつ有明中学・高校に生まれ変わった。新設の難関大学進学コースでの国公立・早慶上理ICUレベル合格50%、GMARCHレベル合格100%という、高い目標を掲げてのスタートだった。それから6年が過ぎ、昨春に1期生が卒業。同コース65人の大学合格実績は、国公立・早慶上理ICUレベル80%、GMARCHレベル188%と、目標を大きく超えた。

こうした数字からは、受験指導に偏向した学校という印象を受けるかもしれない。確かに同校の学習支援は手厚い。中学入学後から宿題の徹底、朝0時間目小テストの積み重ねなどにより、学習習慣の確立をサポート。大学生のチューター中心の学習支援チームが、放課後に苦手分野のある生徒をフォロー。高校では年1回勉強合宿も行われる。しかし、同校の特徴は、むしろこうした学習支援の充実以外の面にあるようだ。

#### 「自分」から「国際社会」へ 6年間でキャリア意識を醸成

開校準備からかわつてきた副校長の石川一郎先生は、一連の学校改革の方向性についてこう話す。

「目指しているのは、知徳・体のバランスがとれた進学校です。これまで部活動や行事にも力を入れてきたスクールカラーを生かし、共学化後も、勉強だけの進学校にはしない方針がありました」

同校が描く生徒の将来像は、鋭い問題意識や幅広い教養など総合的な人間力を備えた「21世紀型グローバル人材」だ(図1)。そのための中高6年間の計画は、学習習慣の確立から文理選択、受験対策へと進む進学プランと、自分を知ることから始め、地域社会から日本、そして国際社会へと視野を広げていくキャリアプランの2本柱で体系化(図2)。その流れに沿って行事や校外研修、進路指導が組み込まれている。

目指すグローバル人材に必要な異文化への理解やコミュニケーション能力育成のため、4カ月間のセメスター留学制度、教育・文化交流で特別提携を結ぶ英国ケンブリッジ大学内での英語研修制度など各種プログラムを用意。さらに、英国のケンブリッジ大学マレイ・エドワーズ・カレッジ、米国の南ミシシッピ大学、中国の武漢大学との提携により、海外の大学への進学道も開かれている。また、海外からの帰国生を積極的に受け入れ、現在は全生徒の8%程度を占める。これにより期待されているのが、帰国生の影響を受けて、それ以外の生徒が海外に対する関心を高める効果だ。

「入学時は英語が苦手でした。そんな生徒が帰国生からの刺激により英語の勉強を頑張る、高校時代に留学、帰国後は海外の難関大学への進学に挑戦する」



### School Data

普通科 / 1903年創立  
 生徒数(2012年度・高校のみ) 526人(男子304人・女子222人)  
 進路状況(2011年度実績) / 大学80.1%・短大1.9%・  
 専門学校7.1%・進学準備9.0%・その他1.9%  
 東京都江東区東雲2-16-1  
 TEL 03-5564-2161  
 URL http://www.ariake.kaetsu.ac.jp/

### Outline

1903年、私立女子商業学校として開校。52年、嘉悦女子中学校・高校に改称。2006年、臨海副都心への移転とともに現校名に改称、共学化。現在、難関大学進学と総合進学の2コースを設置しているが、来年度からはコース制を廃止し男女別クラス編成に変更。校訓は「怒るな働け」。不平・不満を他人や社会の責任にせず、知識・技能をしっかり身につけて社会に貢献し、自分らしく生きてほしいという創立者の願いが込められている。

図2 キャリアデザインの流れ

学年	進学プラン 一模擬試験と面談による個別指導— ＜目指す力＞	キャリアプラン —自分→地域社会→日本・国際社会— ＜目指す力＞
学 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>進学した大学へ進学するための学力</li> <li>センター試験を全員が受験し、得点率8割を目指す力</li> <li>自学自習力の習得</li> <li>発展的な問題に取り組み、学習に意欲的な姿</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自ら進んで行動を起こす主体性</li> <li>日本の伝統を大切にできる力</li> <li>国際人としての教養</li> <li>社会情勢の変化に対応できる力</li> <li>自分の力を常に向上させる発展的な視点</li> </ul>
中 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校の学習スタイルへ切り替える</li> <li>6年間を見通した学習の目標を明確にする</li> <li>読書の習慣を確立する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分を知る</li> <li>自分の将来を考える</li> <li>職業を知る</li> </ul>
中 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>自宅学習の習慣を確立する</li> <li>忍耐強く学習に取り組む大切さを知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域社会を知る</li> <li>職業を調べる</li> <li>科学分野での視野を広げる</li> </ul>
中 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学で学ぶ基礎力を徹底的に習得する</li> <li>高校進学に向けた学習スタイルを確立する</li> <li>高校受験の中学生を意識し、自宅学習2時間を確保する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の歴史・伝統を知る</li> <li>キャリアデザインを組み立てる</li> <li>大学を調べる</li> </ul>
高 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書を中心とした基礎力の定着を図る</li> <li>自宅学習3時間の学習習慣を確立する</li> <li>進学と学習目的を結びつける</li> <li>進路ビジョン(目標とする学校等)を探る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際人としての自分を磨く</li> <li>キャリア実践を体験する</li> </ul>
高 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>弱点を早期に発見し、対策により実力をつける</li> <li>進路ビジョンを意識した学習を確立する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際社会を体験する</li> <li>キャリア実践を体験する</li> </ul>
高 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>受験大学の入試問題を研究し、合格ラインへの到達を目指す学力をつける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会に飛び出すためのステップアップ</li> </ul>

\*リベラルターム：夏休みを利用し、「学びの愉しさ」「知の喜び」を味わい知のため校内外で行われるプログラム

図1 かえつ有明中・高が考える「21世紀型グローバル人材」とは

- 学習意識が強く、鋭い問題意識をもつ
- 国際社会を舞台に活躍できるような実践的な外国語能力と、幅広い教養の習得を志す
- 世界の多様な文化、言語、歴史、社会、そして経済や環境などの国際関係について強い関心と探究心をもつ

総合学習で鍛える  
 クリティカル・シンキング  
 同校がグローバル人材の資質として重視していることの一つに、クリティカル・シンキングのスキルがある。クリティカル・シンキングとは物事を論理的かつ構造的に考えることで、世界各国の人々とのコミュニケーション、各教科学習の理解力のベースとなるものだ。そのトレーニングプログラムとして独自教科「サイエンス」を設定し、中学3年間で総合学習と道徳の時間を利用して展開している(図3)。プログラムの発端は、サイエンスプロジェクト責任者の山田英雄先生が米国の大学院で学び、現地の外国人向けの学校で教鞭をとった経験にあるという。

「米国生活で痛感したのが、自分の英語が通用しないということ。米国では小学校から母語教育の中でクリティカル・シンキングを養成しています。まず結論を言っ自分の意思を主張する彼らに、日本語的に英語を話してもだめだとわかりました。また、現地でクリティカル・シンキングをベースにした教育で成果をあげている学校を視察する機会も得ました。その後、本校に赴任した際、生徒からの反応に乏しい授業に物足りなさを感じ、同僚の教員と話し合ったことがサイエンスにつながったのです」

生徒の論理的・批判的思考を引き出すため、サイエンスのプログラムでは心理学者B・S・ブルームらが提唱する教育目標分類学に基づき、「知育」の6分類を独自に3段階に設定。中1では「知識」「理解」、中2では「応用」「分析」、中3では「総合」「評価」に主眼を置いたスキルトレーニングを行う。授業では教科横断型のオリジナルコンテンツと、教員の教材開発支援機能をもつ図書館「ドルフィン」が制作した教材を使用(図4・5)。さまざまなテーマについて、まずは型にしたがって情報収集、情報の整理・分析、その結果の発表という一連の流れを繰り返すことで、自ら型を越える力へと発展させていく。ブレインストーミングやディスカッションなども積極的に取り入れられている。

例えば、中1春のテーマ「校内エコに学ぶ」では、新聞の特徴を学び、各自が校内の環境に配慮した設備を紹介するエコ新聞を制作する。一般的な作文指導や調べ学習と異なるのは、文章を書く手前の思考段階を重視している点だ。身のまわりにある情報への気づきを促し、「意見」と「事実」



同校オリジナル制作の「リサーチノートブック」。「自分について発表しよう」「ティエイブプロジェクト」などテーマごとに分冊されている



サイエンスの授業では、「教養(読書)」「情報教育」「教材支援」「思考力開発」の4機能をもつ情報センター「ドルフィン」を活用

図3 「サイエンス」でのクリティカル・シンキングのトレーニング方法

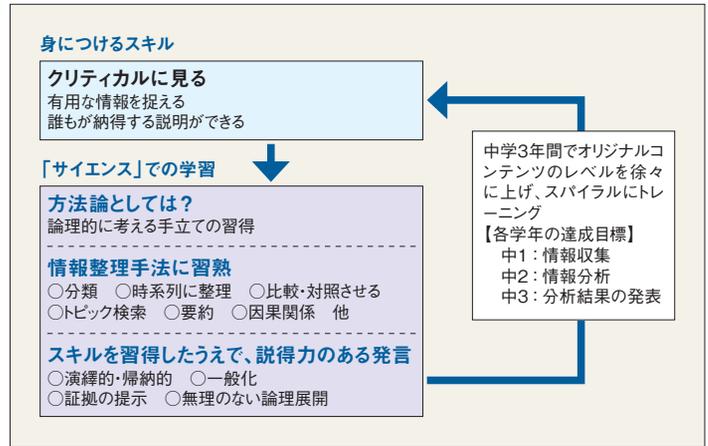


図4 「サイエンス」のオリジナルコンテンツ

学年	中1	中2	中3
コンテンツ	「ライブラリーオリエンテーション」 「思考力を鍛えよう」 ～情報整理のスキル 「校内エコについて学ぶ」 ～新聞作成 「本について学ぼう」 「自分について発表しよう」 「レポートを書こう」 「職業調べ」	「サイエンスの学び」 ～6ステップを理解しよう 「東日本大震災を考えよう」 ～企画書の作成 「東京江戸博物館」 「参考図書を学ぼう～百科事典」 「ティエイブプロジェクト」 ～プレゼンテーション 「グラフを読み解く」 ～PISAテストに挑戦 「意見文を書こう」	「学びの基本について」 「インタネット検索法」 「研究室ごとに調査研究」 「テーマ設定」 「仮説を立てる」 「仮説の検証」 「論拠確認」 「プレゼンテーション」 「批評」

図5 リサーチノートブックより「校内エコに学ぶ」  
ダウンロード可



を区別しながら、「感想文」ではなく「報告文(新聞記事)」としてのまとめ方を学ぶという。

**ファシリテーションを学び他の授業にも生かす**

サイエンスによる生徒のスキルの上達はいくつかの教員が認めるところだが、その授業実践には難しさもある。まず、サイエンスは一般的な授業のように、教員が用意した結論に導くようなやり方は禁物だ。生徒が自発的に動くようになることを目指し、教員はファシリテーターに徹しなくてはならない。授業を行うのは基本的にクラス担

任だが、そのような手法に慣れている教員は稀だ。また、「サイエンスでのトレーニングはいわば、素振り」のようなもの」と山田先生。実践の場でクリティカル・シンキングが生かせるよう、サイエンス以外の授業でも考えさせる授業を行う必要がある。

そうした難しさに対し、同校では週1時間、サイエンスの授業担当者が集合。各学年のサイエンスの進捗状況の確認とともに、ファシリテーターとしてのスキルアップと他教科への応用展開のための研修を行っている。年度の序盤では、まずクリティカルシンキングとは何かという概論をはじめ、プログラムに必要な知識・情報を共有。中盤では効果的な授業方法について議論。終盤で

は各教科・科目においてクリティカル・シンキングを取り入れた授業を促し、ブラッシュアップを図っていく。毎年度このようにサイエンスにかかわる教員が増えるにしたがって、クリティカル・シンキングに対する理解や他教科への応用が広がっている。「担当教科を新しい視点で見直す中で、先生方には新たな発見もあるようです。特に体育や技術・家庭などは」どうしたらうまくできるか』を考えさせるのにクリティカル・シンキングが使えると好評です。生徒との接し方でも、一方的に叱るのではなく、まず情報を与えて生徒の意見を引き出し、そこで間違いがあったら指摘をするようになったという話もありました(山田先生)

**現場に権限を委譲しボトムアップを促進**

開校以来、数々の新しい試みを推進してきた同校。それを支える教員の組織運営面にも着目してみたい。同校では毎年度、状況に応じて組織体系を変更。今年度の

学校運営の柱は学習・生徒・国際交流の3分野で、教務と進路、そして放課後や家庭での学習を支援する学習担当が「学習部」として一体化し、生徒の進路実現をサポートしていく体制が特徴的だ(図6)。

開校当初からしばらくは、トップダウン型で校長や副校長が新しい学校づくりをリードしてきたが、この1～2年はボトムアップを促進する方針で、部長をリーダーとする現場に決定権が与えられているという。運営に関するプロジェクトや委員会は部長や主任が統括し、現場で機動力を発揮できるようになっている。

一方、新しい特色づくりや次の学校全体の方向性を打ち出すプロジェクトは、リーダーを務めるのは現場教員だが、経営判断しやすいように副校長の直下に位置。現在、次の同校の方向性を探るネクストドアプロジェクトのほか、サイエンス、高大連携、ファカルティ・ティエイブプロジェクトといった4つのテーマに関するプロジェクトが行っている。

**1期生の6年間を総括し来年度から男女別学へ**

そのひとつであるネクストドアプロジェクトでは、1期生の6年間を各教科の学力の伸長や学校生活満足度の推移のデータ、学習や生活指導などの現状をさまざまな角度から総括し、次のステップを検討。その結果、培ってきた特色をさらに伸ばすことでグローバル人材の育成にいつそ



サイエンス  
プロジェクト責任者  
山田英雄先生

学習部長  
足立満先生

副校長  
石川一郎先生

図7 男女の成長曲線と中高6年間(13年度～)

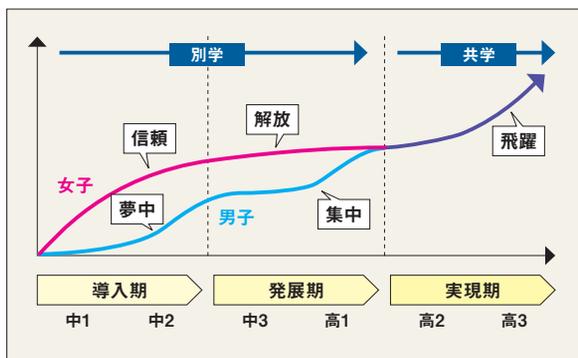
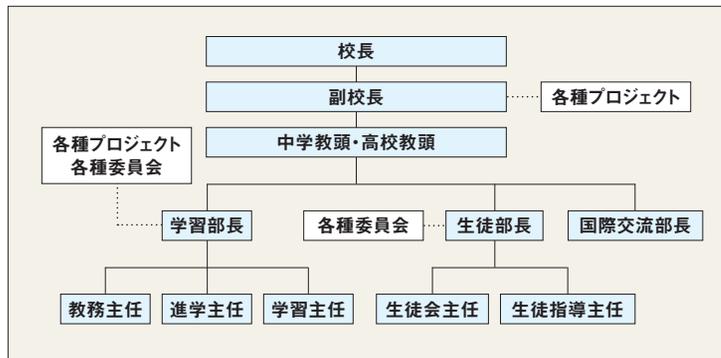


図6 校内組織の概略図



Interview



(写真左から)  
高校1年 桑田力丸さん  
高校2年 中川理彩さん

サイエンスで気づかされた  
すべての教科の大切さ

「正直いうと、サイエンスの授業はつまらないと思っていました。でも、中3の時、他校でサイエンスについて発表した機会に改めて考えてみて、その重要性に気づき、一生懸命取り組むようになりました。そしてもう一つわかったのが、国語力がないと文章にまとめることはできないし、社会について語るなら歴史の知識も必要…など、考えをまとめて情報発信していくには、すべての教科の勉強が大切だということです。それまでは好きなことだけやっていればいいと思っていたのですが、将来さまざまな人とコミュニケーションしていくために、苦手分野のことも知識として知っておきたいと思うようになりました。脳科学に興味があって国立大学の医学部を目指していますが、受験科目と関係なく、どの授業もしっかり取り組んでいます」(桑田さん)

1年間の留学で  
日本の良さを再確認

「自分を見つめ直す機会がほしくて、高1の9月から1年間、米国インディアナ州にある高校に留学しました。もともと英語は好きだったのですが、最初は単語しか出てこなくて苦労しました。でも、思い切って行って、すごくよかったです。留学仲間としてドイツやロシア、ブラジル、韓国などたくさんの国に友達ができただけです。また、離れてみて家族の大切さや日本の良さが見えました。例えば、英語は自分の思いを率直に伝えられて魅力的な言語ですが、日本語でしか作れないニュアンスもいっぱいある。その美しさ、素晴らしさに気づきました。将来の目標はまだ漠然としていますが、卒業後は国際教養が身につけられる大学で社会学を学びたいと考えています」(中川さん)

う力を入れていくとともに、来年度から男女別学とすることが決定した。

男子と女子とで学習の取り組み方や達成感の感じ方などが異なる点に着目し、それぞれに適した目標のもたせ方や関わりにより、最大限の成長を促すのがねらいだ。学校行事やクラブ活動は従来どおりだが、男女で成長度合の差が大きい中学1年から高校1年までのクラス編成は男女別。そして、高校2年からは男女混合の進路希望別クラス編成に切り替え、お互いの良い面の刺激を受けながら切磋琢磨して進路実現を目指すという流れだ(図7)。

「目標のもち方ひとつでも、女子は今やっていることを積み上げて次の目標に向かうという思考をしますが、男子は目標を落とし込んでから今何をすべきかを考えます。女子にはやったことをきちんと褒めながら徐々にハードルを上げ、結果的に高い目標を達成させること、男子には大きな夢を描

かせ、チャレンジと失敗を繰り返させながら成功に導くことが大切だと考えています」(学習部長 足立満先生)

この男女別学化と同時に、開校時に打ち出し一定の成果をあげた特進コースは発展的に解消する。

「学校改革で肝心なのは、複雑化したものはどこかでシンプルにすること。タコ足のようにどんどん広げるばかりでは、パワーにもコストにも限界がきます。時には思い切った選択と集中を行い、次のステップへ進むことも必要でしょう」(石川副校長)

同校が大きな変貌を遂げてきたなかで、教員の戸惑いや反発もあったことは想像に難くない。「先生方それぞれの信念や取り組みはすべて正しい。しかし、学校として結果を出していくためには、優先順位をつけて取り組んでいかなくてはならない」と石川副校長。現場教員だけが参加する会議を設けて意見を吸い上げ、教員への説

明にはデータに基づく資料を用意し、決定事項としてではなく「こうしたい、協力してほしい」というスタンスで話す。個別にも話し合いを重ね、時間をかけて教員の納得感を引き出す。学校全体の共通理解のために大きなエネルギーが注がれてきたからこそ、今の同校の姿があるようだ。

今春、期待以上の成果をあげた1期生について、「チームかえつ」という帰属意識がとて強い」と足立先生。卒業生からは「お世話になったものを後輩に返したい」と、放課後に生徒の学習をみるチューターへの申し出が多数あったという。また、1期生の進路実績は、在校生に「自分たちもやればできるんだ」という自信をもたらした。生徒と教員がともに作ってきた新しい学校の実績は、さまざまな波及効果を生み、次のステージへとつながっていきそうだ。